
ゴブリンシャーマンに召喚されたらダークエルフだった…、その後。

伊藤ナノ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「ゴブリンシャーマンに召喚されたらダークエルフだった…」、その後。

【Zコード】

Z7959Y

【作者名】

伊藤ナノ

【あらすじ】

「ゴブリンシャーマンに召喚されたら、ダークエルフだった…」の後
日談です。

後日談

俺たちは、日本の復興をするのに金が必要だった。東亜連邦共和国の一部として、復興資金を求めた。それなりの金額はでた。

軍隊も500の武装獣がいる。あの戦いで数が減つたのを補充してもらつたのだ。

軍隊の維持には金がかかるのでこれくらいが今の財政状況では一杯だ。

50機を1部隊として、10部隊を治安維持に回している。はつきり言つて足りないのだがしようがない。

武装獣がない地域での機人の来襲には、俺がサンダーボルトとギガバレットの乱れ撃ちで対応しているのが現状だ。

機人はどうやら太平洋諸島から来ているようだ。

機人がいないと魔石が取れない。東亜連邦は魔石を取るために戦闘艦を複数用意して太平洋諸島で戦つてはいるようだが、俺にはお呼びがかからない。俺が行くと機人を殲滅してしまうからだ。東亜連邦の目的は魔石の定期的な確保であつて殲滅ではない。

日本では、四国だけ機人を残して置いた。そこから飛来する機人から魔石を取るのだ。なので俺の部隊は四国周辺の地域に主に展開している。

後は地道にインフラ整備をする必要があつた。魔導機関を作成する工場を東亜連邦の協力で建築をしていった。これがないとこの世界では動力源がない。発電も魔導機関で行なつてはいるのだ。

四国周辺からインフラ整備を始めた。なぜなら武装獣の部隊を配備している治安を維持できるところがこの地域だけだからだ。

具体的には九州、中国、近畿地方が対象になる。投資する資金が限られているのだ。ここから俺とアヴェルアー力は復興の仕事を始めた。

発電所を造り道路を造り、廃墟になっていた街を作り替えていく。気の長い仕事だ。

仕事をしていくうちに俺は200才になっていた。約10年で日本にも人が住むようになっていた。冒険者には機人が必要だ。冒険者も集まってきた。ギルドも作られている。冒険者が入ればそれを当てにする商売をする人間もやつてくる。

東亜連邦では主にインドネシアから魔石を取っているがそこは軍の戦闘地域だ。ヨーラシア大陸から隔てられた諸島では冒険者が行くには難しいようなのだ。

人が増えてくれば食料の確保も必要だ。農業、漁業にも投資を行つた。瀬戸内海は危険地域だが日本海なら安全だ。

これは気長に投資をしていくしかない。いつまでも東亜連邦に頼つてはいられないのだ。

更に10年が経つた。経済は順調に立ち上がっているようだ。俺は西日本での利益を東日本に当てられるようになっていた。東日本の担当はアヴェルアー力だ。アヴェルアー力も40才になっていたがまだ元気だ。だが、ロードはエルフほど長生きはできない。魔力が高いほど長生きするようだが、それでも200才が限界だろう。

更に20年が経つた。東日本の復興も順調だ。発電所も建設した。道路や街の復興も行なつていった。東京は最優先に復興した。名古屋も順調だ。元々あつた病院、学校などの福祉的な施設も次々と増やした。魔導機関による列車も次々と開通中だ。もう東亜連邦の支援はいらなくなつた。問題は俺とアヴェルアークとの間には子供はできないということが分かつたことだ。俺は人造人間ではない。どちらかと言えば人間に近いのだ。人造人間と人間の間には子供は生まれない。少し寂しいがこればかりはどうしようもない。俺たちの子供はこの日本だ。そうアヴェルアークに言つた。

更に30年が経つた。北海道を除けばほぼ復興は終わつた。北海道は観光地と漁業、農業、畜産、林業として育ててはいるがなかなか人が集まらないのだ。やはり寒いのは嫌なのだろうか。それに比べて沖縄は順調にいつている。南国は確かに魅力的だ。

それでも沖縄は赤字だ。昔の日本でも沖縄は国の補助金で賄われていたのが大きかった。北海道と沖縄はお荷物なのだ。

俺とアヴェルアークは北海道について話しあつた。

「どうするのよ？これ以上は人は集まりそうにないわよ

「仕方がない、北海道に限つて農業と畜産の法人化を認める。人さえ集まればいいのだ。それで商業もうまくいく」

「分かったわ、それしかないようね」

これで北海道は企業による参入で回復した。

とうとう、その時がきてしまった…。アヴェルアークが倒れたのだ。もうアヴェルアークも180才だ。引退してもらつていたが、それ

でも老化ばかりは止められない……。若返りの魔法などないのだ。

「アヴェルアーク聞こえるか？」

「聞こえるわよ、セージ」

「俺たちの子供、日本は成長した。お前は十分な仕事をしたんだ、ゆっくりしていいんだぞ」

「そうね……、ゆっくりさせてもううわ……、今まで楽しかったわ、セージ」

「まだ一緒にいよう！な？アヴェルアーク」

「私はもう駄目みたいなの……」

「俺が回復してやる、死なせない！」

全体回復を発動した！だが、探知で俺は分かつていた。アヴェルアーカへの探知が弱つていて、もう時期死ぬと……。

「俺もアヴェルアークとして楽しかった！アヴェルアークがいたからこの世界で生きていく」と思ったんだ」

「あ……り……が……と……」

アヴェルアークは息を引き取ったのだ。

「アヴェルアーク！！！」

俺は泣いた。涙が止まらなかつた。

それからの俺は魂が抜けたようだつた。仕事をする氣にもならなかつた。もう俺がやらなくても日本の運営は回るようになつてゐる。

俺はなんのためにここにいるのか分からなくなつたのだ。

自然と足がモスコーヴィアに向かつていった。そう魔導研究所だ。

「英雄がこちらへなんの御用でしようか？」

「」の所長のヴァスカーヴィルといふらしい。

「以前、俺は」で召喚魔術の方法を伝えた、それについて情報共有したい」

「分かりました。付いてきて下さい」

俺は魔導研究所の召喚魔術の研究所に足を踏み入れた。

そこにはあの魔方陣が完成していたのだ。」には6人いた。

一々、聞いて教わる必要などない。俺はそこにいる全員の意識を順々に奪つて次々と知識を奪つていた。

どうやら、召喚魔術は完成に近づいてゐるらしい。発動のキーがあ

と一歩足らないのだ。

俺はそれがなにか分かつていた。前の世界の魔導院の資料室で俺が知つた知識の一つを埋め込めばいいのだ。

そして、今どこかで召喚術が発動する気配を観測していることも奪つた知識で分かつた。

どこかの異世界からこの世界の人間を召喚しようとしているのだ。

俺は魔方陣の中に立つて、詠唱を開始した。その召喚とこの魔方陣を繋ぐのだ。

魔法は発動した。俺は光に包まれそしてこの世界から消えた。

後日談（後書き）

これが後日談です。4章ルートが開いていますが、無理っぽいです。
⋮。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7959y/>

ゴブリンシャーマンに召喚されたらダークエルフだった…、その後。
2011年11月23日18時49分発行